

## 新編鎌倉志

かわい・つねひさ

作者:河井恒久(生没年不詳)

成立:貞享2年(1685)



## 解題

## Keyword

- 水戸藩
- 徳川光圀
- 藩撰地誌
- 鎌倉
- 「鎌倉日記」
- 金沢
- 「新編相模国風土記稿」
- 「鎌倉攬勝考」

江戸時代中期、水戸藩主・徳川光圀が家臣の河井恒久らに命じて編纂・刊行させた藩撰地誌。延宝2年(1674)に徳川光圀が鎌倉の名所

や史跡を巡覧した際の『鎌倉日記』をもとに編纂された。鎌倉、江の島、金沢の名所旧跡を豊富な文献史料に基づいて解説しており、『新編相模国風土記稿』(#23)『鎌倉攬勝考』(#21)とともに、鎌倉に関する基本的な文献史料である。書名は『鎌倉志』ともいう。



(版本)『新編鎌倉志 巻之1』巻頭 柳枝軒版

## ■ 成立経緯

延宝2年、徳川光圀が鎌倉や武州金沢の名所旧跡を巡覧し、それを『鎌倉日記』にまとめた。この2年後の延宝4年(1676)、光圀は家臣の河井恒久を鎌倉に遣わして古社旧刹の由来をさらに調査させ、これを、鎌倉の地理に詳しく、英勝寺で療養中の松村清之に校訂させた。しかし、恒久が途中で病没したため、力石忠一が光圀の命を受けてその業を引き継ぎ、本書を完成させ、貞享2年(1685)、京都の版元・茨木屋多左衛門(柳枝軒)によって全8巻・12冊で出版された。

## 内 容

各巻の量は1日の行程を範囲とし、鶴岡八幡宮を中心として、北は本郷(現・横浜市栄区)、東は金沢(現・横浜市金沢区)、西は固瀬(現・藤沢市)、南は杜戸(現・葉山町)と、鎌倉に関係の深い周辺地域にまで記述が及ぶ。

巻1の最初に「鎌倉地理之図」を付し、鎌倉の概略、続いて鶴岡八幡宮の由来を記述している。巻2以下では、各地域の神社・仏閣・名勝・旧跡等について記述し、項目によっては、その中をさらに境内の堂宇、宝物等の項目に分け、詳細に説明している。全体で記述は242条に及び、絵図も挿入している。

## 諸 本

本書は、延宝2年(1674)『鎌倉日記』の時の巡覧、河井恒久・力石忠一による学究的な現地調査をもとに編纂されている。後年刊行された数多くの鎌倉のガイドブックの主要な参考文献となっているが、「引用書目」によると、『万葉集』をはじめ、信頼のおける119の文献史料を利用して史的考証を行っており、学術的にも価値が高い史料といえる。

本書は、京都の版元・茨木屋多左衛門(柳枝軒)によって、貞享2年(1685)に全8巻を12冊に分冊して出版された。若干の補刻はあるものの、明治34年(1901)まで同じ版本を使用して、たびたび刊行された。出版されてから200年以上にわたって、需要が衰えることなく、人気のあった本であるといえる。大正4年(1915)『大日本地誌大系』に収録された活字本ができるまで、この整版本が唯一の刊本であった。同版本でも後印本では10冊、さらに明治の後印本になると8冊というように、刊年が新しくなるにつれて冊数が少なくなっている。

『国書総目録』によると、現在、写本は内閣文庫と筑波大学で所蔵している。版本については、神奈川県立図書館、神奈川県立金沢文庫、国立国会図書館、内閣文庫、静嘉堂文庫、東京大学史料編纂所、東京都立中央図書館(加賀文庫)等、多くの図書館・資料館で所蔵している。翻刻本は『大日本地誌大系』に収録されている。

## 「鎌倉日記」

『鎌倉日記』は、徳川光圀が延宝2年5月、鎌倉や武州金沢の史跡・名勝を巡覧した時の記録である。5月2日から同月9日までの7日間、金沢八景・鎌倉等を巡覧してから江戸小石川の藩邸に帰着するまでに見聞きしたことを日記のように記述している。鎌倉では、水戸家と関係の深い英勝寺の春高庵を宿所として各所を巡っている。

文章は、光圀自身が記述した形をとっているが、実際には家臣の吉弘元常らに記述させたものである。多くは案内者の説明をそのまま書き留めていると考えられ、位置の誤りや、伝承の違い、現在は伝わっていない地名など、史料的に貴重な記述が見られる。延宝4年(1676)には河井恒久を鎌倉に遣わ

し、さらに精査させ、それが『新編鎌倉志』となることから、『鎌倉日記』は、『新編鎌倉志』編纂の基礎史料といえる。『新編鎌倉志』は、鎌倉の中央部に位置する鶴岡八幡宮を中心として各所の記述があるが、『鎌倉日記』は光圀が巡覧した順に記述されていると考えられている。両書の記述は類似しているが、同文ではなく、『新編鎌倉志』では、引用・参考文献が多く記述されている。『鎌倉日記』の引用書目は32部であるが、『新編鎌倉志』では119部に増加している。「日記」としているが、内容は学術調査報告書とってよいものである。

また、この時、記録類や鐘銘などを別紙に写し、地図も作成された。これらの資料の所在については確認されていないが、かなりの部分が『新編鎌倉志』の編纂に利用されたと考えられている。

『鎌倉日記』の原本と考えられるものは、水戸市にある彰考館で所蔵している。この他、写本を神奈川県立公文書館、国立国会図書館(陸軍文庫、編修地志備用典籍)などで所蔵している。翻刻は、彰考館本を底本としたものが『水戸義公全集 中巻』、『鎌倉：古絵図・紀行 鎌倉紀行篇』に、神奈川県立公文書館本を底本としたものが『鎌倉』12・13号、『鎌倉市史 近世近代紀行地誌編』にそれぞれ収録されている。



## 構成

序、凡例、引用書目、総目

- 巻1 鎌倉大意、鶴岡八幡宮の来由～鶴岡の東北・蛇谷(へびがやつ)
- 巻2 鶴岡の東・鳥合原(とりあわせはら)～牛蒡谷(ごぼうがやつ)
- 巻3 鶴岡の西・巨福呂坂(こぶくろざか)～洲崎
- 巻4 鶴岡の西・鉄井(くろがねのい)～梶原村
- 巻5 鶴岡の西南・今小路～御霊宮
- 巻6 鶴岡の西南・星月夜井～江島
- 巻7 鶴岡の東南・小町～佐賀岡
- 巻8 鶴岡の東・朝夷名切通～金沢



## 史料本文を読む

<版本>

- 『新編鎌倉志』全12冊 河井恒久撰 柳枝軒 1685(貞享2) [K291. 4/26/1～9]

<影印本>

- 『新編鎌倉志(貞享二刊)：影印・解説・索引』白石克編 汲古書院 2003 [K291. 4/343] (索引あり)

<翻刻本>

- 「新編鎌倉志」(『大日本地誌大系』第5冊 日本歴史地理学会校訂 大日本地誌大系刊行会 1915 [K291. 4/327]) (索引あり)

- 「新編鎌倉志」（『大日本地誌大系』第19巻 蘆田伊人編 雄山閣 1929 [291.08/2/19]）（索引あり）
- 「新編鎌倉志」（『大日本地誌大系（増訂版）』第21巻 蘆田伊人編 雄山閣 1958 [291.08/6/21]）（索引あり）
- 「新編鎌倉志」（『新編相模国風土記稿』第6巻 雄山閣 1972（大日本地誌大系24） [K291/1A/6]）（索引あり）
- 「新編鎌倉志」（『新編相模国風土記稿（第2版）』第6巻 雄山閣 1998（大日本地誌大系24） [K291/1D/6]）  
 ※ 「新編鎌倉志・鎌倉攬勝考」索引（『新編相模国風土記稿（第2版）』索引篇 雄山閣1998（大日本地誌大系） [K291/1D/7]）



## 史料についてさらに知る－参考文献－

- ◆ 高木利太「日本地誌編纂史概略」「新篇鎌倉志」（『家蔵日本地誌目録』高木利太 1927 [291.03/3/1]）
- ◆ 芳賀登「日本近世における地誌学の発達」（『地方史の思想と視点』児玉幸多他編 柏書房 1976（地方史マニュアル1） [210.07/23/1]）
- 『新編鎌倉志（貞享二刊）：影印・解説・索引』白石克編 汲古書院 2003 [K291.4/343]
- ◆ 関幸彦「鎌倉の水戸黄門」「『新編鎌倉志』と『鎌倉攬勝考』」（『「鎌倉」とはなにか』関幸彦著 山川出版社 2003 [K21.4/32]）
- ◆ 相田二郎「相模国の古文書について」（『古文書と郷土史研究』名著出版 1978（相田二郎著作集3） [K08.7/1/3]）
- <『鎌倉日記』について>
- ◆ 「光圀『鎌倉日記』（乾・坤）」（『鎌倉』（12）（13）鎌倉文化研究会 1964 [K05.4/4/6-12・13]）
- ◆ ＊「鎌倉日記」（『水戸義公全集 中巻』徳川圀順編 角川書店 1970）
- ◆ 鈴木棠三「『鎌倉日記』解題」（『鎌倉：古絵図・紀行 鎌倉紀行篇』鈴木棠三編著 東京美術 1976 [K291.4/121/2]）
- ◆ 「鎌倉日記〔徳川光圀歴覧記〕」（『鎌倉市史 近世近代紀行地誌編』鎌倉市市史編さん委員会編 吉川弘文館 1985 [K21.4/4-2/1]）
- ◆ 「鎌倉日記」（『鎌倉への道』鈴木棠三著 三一書房 1988 [K291.4/219]）  
 ※ 『鎌倉：古絵図・紀行 鎌倉紀行篇』所収「鎌倉日記」解題の再録